

都市政策・地域経済ワークショップ1 第 11 回 議事録

【テーマ】「アルテ・ウティル(有用芸術)と日本のアーティストたちの実践」

【講 師】細野泰久氏: インディペンデント・リサーチャー

(武蔵野美術大学の非常勤講師 他)

担当教員: 吉田 隆之 教授

【日 時】2025 年 6 月 20 日(金)18:30～21:20

【場 所】大阪公立大学大学院 都市経営研究科 梅田サテライト 101 教室

【参加者】都市政策・地域経済コース M1 学生 他

■ 講義概要

- 講演者の紹介

本日の講師は、インディペンデント・リサーチャーの細野泰久氏でした。細野氏は、特定の組織に属さず、独立した立場で研究や批評活動を行なわれています教育、福祉といった多岐にわたる分野でご活躍されています。

今回は、「アルテ・ウティル(有用芸術)」をテーマにご講義いただきました。本講義では、アルテ・ウティルの概念を掘り下げるとともに、日本のアーティストたちがこの概念をどのように実践しているかについて、具体的な事例を交えながら解説いただきました。

■ 講義内容

はじめに、主催である当大学院吉田隆之教授より、アルテ・ウティル(有用芸術)という言葉は、一般には聞き慣れない概念である。しかし、現代社会においてイスラエルとイランの緊張が高まり、世界の分断と対立が深まる中で、アートがこうした対立や差別に対し、どのように貢献できるのかという問いが重要性を増している。欧米中心主義や多文化主義の限界が指摘される中、様々な実験的な試みがなされており、アルテ・ウティル(有用芸術)は、既存の芸術の枠組みや社会の慣習、政治体制、商業主義などに対して根本的(ラディカル)な問いを投げかけ、挑戦する芸術その一つとして注目されている。メンタルの不安や異議申し立て、あるいは日本におけるブランド化といった問題にも関連する概念である。

国内では、山口情報芸術センターのキュレーター、レオナルド・バルトロメウスが関心を持ち、支援している既存の芸術の枠組みや社会との関係性を問い直す点で共通しており、世界的には一つの分野として確立されつつあるが、これらは、日本ではまだほとんど知られていないそうです。

- 1. アルテ・ウティル(有用芸術)について

・「有用芸術」

有用芸術(アルテ・ウティル)は、その名の通り、社会や人々に具体的な「有用性」や「役立ち」をもたらすことを目

的とした芸術を指します。これは単に「見た目が美しい」といった鑑賞的価値に留まらず、社会的な課題の解決、コミュニティの形成、人々のエンパワーメントなど、具体的な変化や影響を生み出すことに重点を置きます。これを読まれた皆さんのそばにも、存在したり、気づかないところで、アーティストが緻密な思考の上、課題解決を意図とした有用芸術だと思える作品などもあるということです。

アルテ・ウティル(有用芸術は、従来の「芸術のための芸術」という考え方とは一線を画し、アートを社会変革のツール、あるいは社会に貢献する手段として捉える革新的な概念と言えるでしょう。

- 2. アルテ・ウティルの理解とアートの新たな可能性の示唆

・2-1. アルテ・ウティル(有用芸術)のポイント

細野泰久氏は、自身が都市系研究科という堅いイメージの場所で美術という非常にラフな分野の話をするこへの戸惑いを述べつつも、リラックスして聞いてほしいと参加者に呼びかけ、和やかな雰囲気語られた。講演では、これまでのリサーチやワークショップの写真など数多くを貼り付け展示いただけ、数多くの事例が紹介された。講演では、「アルテ・ウティル(有用芸術)」という聞き慣れない概念を導入し、分断と対立が深まる現代社会においてアートが社会貢献できる可能性について、欧米中心主義や多文化主義の限界を踏まえつつ、具体的な実践例を交えながら多角的にご講演いただいた。特に、公開ワークショップであったため、参加者が「アルテ・ウティル(有用芸術)」という概念を理解し、そしてそれが現代社会においてアートがどのような役割を担い、社会貢献できるのかという新たな可能性をわかりやすく、目に見える形で、提示いただけた講演でした。国際的な緊張が高まり、分断と対立が深まる現代において、アートがそうした社会状況にどう貢献できるのかという問いに対する具体的な事例をもとに、示唆を与えていただける非常にいい機会となりました。まず、細野泰久氏は、以下の点を強調された。

「アルテ・ウティル(有用芸術)」という概念の導入と普及の促進状況については、日本ではまだ聞き慣れないこの概念を、その哲学的背景と実践的な意味合いを含めて紹介することで、参加者の理解を深められるよう、欧米中心主義や多文化主義の限界に対する問題提起として、既存のアートや社会貢献の枠組みが抱える課題を指摘し、新たなアプローチの必要性を提起いただきました。つまり、アートは、社会課題(例えば、教育、福祉、etc)に貢献できる可能性として、アートが単なる表現活動に留まらず、社会の具体的な問題に対し、迅速かつ直接的介入し、変化をもたらす力を持ちうることをわかりやすく語られた。

・2-2. 具体的に細野泰久氏の実践例のご紹介(映像や写真での紹介)

* 横浜でのリサーチ (2017 年): 車椅子利用者と共に、ヨコハマトリエナレー会場と横浜駅や桜木町などの駅間を移動し、段差や傾斜の危険性を調査する活動を行った。地下鉄ホームの傾斜や段差が、車椅子利用者にとっての障壁となる実態が示された。

* 武蔵野美術大学美術館でのワークショップ: 小学生を対象に、リートフェルト、ミース・ファン・デル・ローエの椅子

に座ることで、視覚だけでなく身体全体で作品を体験するワークショップを行った。背中に指文字を書く、ダンボールで椅子を作るなど、身体感覚に注目した実験的な試みが紹介された。

* 民俗学者で武蔵野美術大学教授だった宮本常一氏の数万点のコレクションを活用し、不登校の子どもたちへの授業やワークショップの準備を学生と共に行った。留学生や小平市在住の精神疾患当事者等とともに、ダンボールで作ったカメラ・オブスキュラを体験したり、ピンホールカメラを製作して写真を撮影したりするワークショップを実施した。

* 学生たちとの車椅子体験を通して、アスファルトの凹凸や段階を乗り越える難しさなど、身体で学ぶことの重要性が強調された。

どの実践例も目的、社会課題解決という難しい課題を、自然な形でプロセスから参加者も関与し、成果などを引き出していくプロセスを映像や写真を通じて見える化までご用意いただきました。特に、武蔵野美術大学の小学生対象の事例や小平の精神疾患当事者との事例は、参加者が楽しんでいる様が見受けられた事も印象的でした。また、どれも新鮮な事例で、多様性が問われる時代にアートの新たな可能性を講演参加者も感じられたと思います。

-3. アルテ・ウティル(有用芸術)の定義と特徴

細野泰久氏は、アルテ・ウティル(有用芸術)について、キューバ出身のアーティスト、タニア・ブルゲラが提唱した概念であり、単に「破る」という行為だけでなく、美術館の立場や様々な緊張関係の中で、アーティストが社会に介入していく活動であると説明された。特に、あいちトリエンナーレ 2019 で起きた表現の不自由展・その後を例に挙げ、難民の数を可視化するプロジェクトや、テート・モダン(イギリスのロンドンにある現代美術館)での人々の協力を促す作品など、具体的な事例を通じてその特性を解説されました。

これは、非常に印象的で、人々の協力得ての作品ですから、作品が完成し、眺めたとき涙が自然に出てきた方も居たとのことと、有用芸術と言われる所以を象徴する作品と感じました。

- 4. アルテ・ウティル: 美と実践の新たな融合

・4-1. アルテ・ウティル(有用芸術)の7つの原則とは

細野泰久氏は、アルテ・ウティル(有用芸術)の核心には、「緊急性」という概念があるとのこと。これは、伝統的な美術史が長期的な視点で作品を評価するのに対し、アルテ・ウティルが社会の差し迫った課題に対し、迅速かつ具体的な介入を目指すという点で、その独自性を際立たせているそうです。」細野泰久氏は、災害救助や医療現場における緊急対応の重要性を例に挙げ、アートもまた、そうした切迫した状況下で力を発揮しうること

強調しました。アルテ・ウティルは、単なる表現活動ではなく、社会システムの不均衡や不正に対し、アート創造性を活用して具体的な解決策を模索すると示唆された。

この概念には、支える 7 つの原則があるそうです。

アルテ・ウティル(有用芸術)が単なる理論に終わらない、有用であり、実践的な指針を提供してくれます。それぞれの原則は、アートが単なる自己表現の手段から、社会変革の触媒へと進化するためのロードマップを示していると言えるでしょう。以下が7つの原則をご教示いただきました。

① アーティストによる行動の開始:

具体的な問題提起だけでなく、行動を起こすことが求められます。思考だけでなく、実際に手を動かし、社会に働きかけることからすべてが始まります。

② 観客の「利用者(ユーザー)」化:

受け身の鑑賞者ではなく、能動的な参加者(ユーザー)として関わるのが促されます。アートは一方的に提供されるものではなく、共に創り上げるものです。

③ 実用的な利益の追求:

社会的、あるいは経済的な具体的な成果を生み出すことを目指します。単なるコンセプトではなく、実際に社会に役立つ結果を重視します。

④ 学習機会の提供:

参加者が新たな知識やスキルを獲得する機会を創出します。アートを通じて、学びと成長の場が提供されます。

⑤ 持続可能性:

単発的な活動で終わらず、継続的な影響を生み出すことを目指します。一時的な盛り上がりでなく、長期的な視点での社会貢献を重視します。

⑥ 倫理学への転換:

従来の美学(Aesthetics)に加え、倫理学(Ethics)が重要な判断基準となります。アートの制作や実践が社会に対してどのような影響を与えるかを深く考察します。

⑦ 緊急性:

社会の切迫した課題に対し、迅速に対応することが求められます。スピード感を持って、差し迫った問題にアートの力で介入します。

アルテ・ウティル(有用芸術)は、従来の「芸術のための芸術」という考え方とは一線を画し、アートを社会変革のツール、あるいは社会に貢献する手段として捉える概念ということです。

・4-2. ソーシャルエンゲージドアートとアルテ・ウティル(有用芸術)について

細野泰久氏は、森美術館の片岡真実館長が提唱する「ソーシャルエンゲージドアート」の概念にも触れ、リレーショナルアートにおける関係性よりも、より広い一般社会との「エンゲージメント(関わり)」を重視する視点も紹介されました。アルテ・ウティル(有用芸術)がスタジオやギャラリーの中だけでなく、社会の現場で実践されるアートで

あることが強調された。

また、ソーシャルエンゲージドアートにおけるプロジェクト設計の考え方として、以下の点があるとのこと。

- ①社会的目的 (Social Purpose): ポジティブな社会的目的を持つこと。
- ②プロセスを通じたゴール達成 (Process and Goal): プロセスを通じて成果を達成すること。
- ③社会的相互作用と参加協働 (Social Interaction and Participation): 他者とのエンゲージメントや参加協働を重視すること。
- ④芸術的手法 (Artistic Methods): ソーシャルワークだけでなく、芸術的手法を用いること。
- ⑤オリジナリティと曖昧さ、敵対性の許容: オリジナリティを追求し、曖昧さや敵対的な意見も受け入れることと語られた。

・4-3. アルテ・ウティル(有用芸術)と従来の芸術概念との差異について

アルテ・ウティル(有用芸術)が従来の「芸術」の概念とは異なる点を繰り返し強調されました。アルテ・ウティル(有用芸術)は、単に何かを「表象」するのではなく、実際に社会を変えることを目的としている。具体的には、ベネズエラでの音楽教育プロジェクトや、国連本部にあるイザヤ書の一節を体現する武器を溶かしてスcoopにするスペインのアーティストのプロジェクトなどが例として挙げられた。これらは、まさに「手を動かして、新しい世界を創る」アルテ・ウティル(有用芸術)の精神を具現化したものである。

また、アルテ・ウティル(有用芸術)は必ずしもアーティストが自覚的に行っているものではなく、事後的にアルテ・ウティル(有用芸術)として評価されるケースもあると述べられました。重要なのは、従来の芸術が「鑑賞するだけ」「聞くだけ」といった受動的な行為であったのに対し、アルテ・ウティル(有用芸術)は具体的な社会課題を解決し、多くの人が触れ、共有できる「具体物」として世界に存在することだそうです。

・4-4. 前述の 7 つの分類とソーシャル(社会的)の意味

細野泰久氏は、アルテ・ウティル(有用芸術)7 つの分類があることが紹介され、プロジェクトはこれらのカテゴリーに分類される。特に、「ソーシャル」という言葉の日本語における意味合いと、本来の意味(福祉という概念を含む)を指摘された。アルテ・ウティル(有用芸術)における「ソーシャル」は、単なる福祉活動ではなく、より広範な社会的な実践を意味することを再度、強調された。

・4-5. 美の概念とアルテ・ウティル(有用芸術)

細野泰久氏は、美の概念自体が再考されるべきであると述べられました。美は、単なる表層的な感覚(形、色、構成など)の心地よさだけでなく、真善美といったより深い意味を含んでいる。特に、ルッキズムや差別といった問題において、表面的な美が社会格差を助長する可能性も指摘された。アルテ・ウティルは、こうした美の概念自体を問い直し、従来の「芸術」の定義にとらわれない、よりラディカルなアプローチを提示された。

- 5. 日本におけるアルテ・ウティル(有用芸術)の萌芽:実践者たちの挑戦

細野泰久氏は、日本においてもアルテ・ウティル(有用芸術)の精神に通じる活動を行うアーティストが多数存在することを具体例を挙げて紹介していただきました。特に、渡辺篤氏のプロジェクトは、その深い倫理観と社会介入の具体性において特筆すべきものです。渡辺篤氏は、引きこもりの当事者と協働し、彼らの内面的なトラウマや日常の風景を作品として昇華(社会に認められる目標に目を向け、その実現により自己実現を図る)させます。「同じ月を見た日」のように、当事者が撮影した写真を匿名で共有する試みは、物理的な隔たりを超えた共感と対話を促し、彼らの存在を社会に可視化する役割をはたしていることを教示いただいた。渡辺篤氏の実践において際立つのは、当事者を「搾取しない」という徹底した倫理観です。作品の著作権や収益が共同制作者である当事者と公正に分配される仕組みは、アートの世界においてしばしば見過ごされがちな権力関係を是正しようとする強い意志を示しています。また、彼の作品が「金継ぎ」の概念に重ねて語られるように、壊れたものに新たな価値を見出し、再生させるという側面は、当事者自身の回復と社会復帰を促すメタファー(暗黙の内に結び付ける)としても機能していると、わかりやすく説明いただいた。

そのほか、あべさやか氏による精神障害者の表現支援、工藤春香氏による障害者を取り巻く問題へのアートの介入、坂本夏海氏によるコミュニティ形成を促すプロジェクト、藤口諒太氏による地域との協働や依存症患者支援、友清ちさと氏による精神疾患当事者との共同制作やアートによるホームレス支援などもご紹介いただきました。いずれも単なる作品制作に留まらず、社会の具体的な課題に対し、アーティストが能動的に関与している点が共通しているそうです。これらの実践は、日本のアートシーンにおいて、アルテ・ウティル(有用芸術)が多様な形で展開されていることを示唆しています。

- 6. アートセラピーとの本質的な相違:診断を超えたケアの探求

講演中の質疑にも応答いただきました。提起されたアルテ・ウティル(有用芸術)とアートセラピーの違いに関する点は、両者の本質的な相違を明確にしました。アートセラピーが、専門家による「診断」に基づいた治療行為であるのに対し、アルテ・ウティル(有用芸術)は診断を行わず、参加者の多様性と主体性を尊重します。これは、従来の医療や福祉が持つ「専門家が患者や障害者を診断し、一方的に介入する」という構造とは違う視点を含んでいます。

細野泰久氏は、アートセラピーが特定の症状や疾患を対象とし、治療法を適用するのにに対し、アルテ・ウティル(有用芸術)は症状や状態そのものに焦点を当てずに、「ユニバーサルなケア」を提供しようとする点を説明しました。これは、例えば LGBTQ+の人々がかつて精神疾患として分類されていたように、社会が特定の属性や状態を「異常」と診断し、排除してきた歴史に対する問いかけでもあります。アルテ・ウティル(有用芸術)は、こうした診断によるレッテル貼りを避け、個々の存在が持つ多様性と可能性をアートの力で引き出すことを目指しているのです。それは、社会の周縁に追いやられた人々の声に耳を傾け、彼ら自身の力で現実を変えていくプロセスを支援する、

より包括的で非侵襲的なアプローチと言えると表現された。

- 7. グループワーク

休憩をはさみ、細野泰久氏が、専門の一つである美術の授業や講習などでワークショップとしてされているという、実習を体験させていただいた。美術においては、単なる美的対象としてだけでなく、社会に積極的に関与し、変化を生み出すという広い意味でのソーシャル・プラクティスとしての可能性を浮き彫りにする教育手法のひとつ。プロセスは、①参加者が一人一人が、社会問題をいくつか書き出す。②共通した社会課題や似た課題に、リスト分けする。③いくつかのグループに別れ模造紙に、その課題を選択し一つ書く。④その周りに、アートの感覚で思い思い解決策を書き込む(高齢者対策⇒街中に、日常の散歩道など、安全そうな場所に椅子を配置。道路はバリアフリー。見守れるように、日常空間を平面で捉えて整備・・・など)、単純な作業だが、それぞれ複数のメンバー(社会)と接続(意見を出し合い)し、共創を自然に参加型体感する。これが美術専攻者なら、ケガのしにくいデザイン椅子をイメージしたり、イラストを書いてみたり、様々な経験知なども重なり、日常の行動半径に距離をイメージし、均等配備したり創造するのだろうかと思いつつ、少ない時間ではあったが、体験を通し、記録や苦悩といった役割を超え、コミュニティの再生、参加者の声の可視化、対話の創出といった体験プロセス自体が、社会貢献を目指す手法で、「アルテ・ウティル(有用芸術)」の概念が提唱する「有用性」と強く結びつくものと感じました。

今後も、社会が直面する様々な課題に対し、アートがどのように向き合い、その創造性で貢献できるのか、ソーシャル・プラクティスとしてのアートと、それを支える教育の役割はますます重要になると貴重な体験することができました。

- 8. まとめ: アートの新たな地平と社会への貢献

細野泰久氏の講演は、「アルテ・ウティル(有用芸術)」という概念が、現代社会におけるアートの新たな地平を切り拓く可能性を強く示しました。それは、アートが単なる美の追求や自己表現の手段に留まらず、社会の具体的な課題に対し、能動的に関与し、緊急性をもって介入し、そして倫理的な配慮を持って変革を促す「有用な芸術」としての役割を担うことができるという確信を与えてくれた。

日本においては、まだその認知度が低いものの、渡辺篤氏をはじめとする日本のアーティストたちの実践は、すでにアルテ・ウティルの精神に通じる活動を展開している。彼らの活動は、アートが美術館の白い壁を越え、コミュニティに入り込み、多様な人々と協働することで、具体的な社会変革を生み出す力を秘めていることを示しています。分断と対立が深まる現代において、アートが社会に貢献できる可能性は、これまで以上に重要になっています。アルテ・ウティル(有用芸術)の概念と、それに裏打ちされた実践は、アートが単なる「癒し」や「表現」の領域を超え、具体的な社会課題の解決に寄与する「力」となりうることを示唆していただきました。

議事作成担当: 松木勝美